社団法人名北労働基準協会

六十年のロマン

石田幹夫

いま、ご覧いただいております「Ｍｅｉｈｏｋｕ（名北労基）」は１４７３号、協会設立（昭和26年10月22日）の翌27年１月10日「名北労働基準協会報」として第１号発行以来、一度の欠刊・遅刊もなく今日に至っている。

いわば、名北協会60年の歴史の生き証人でもある。

―伊勢湾台風の襲来―

昭和34年９月、超大型台風が東海地方を直撃し、死者４、９５９人、家屋全壊３、６００棟強と伊勢湾周辺の東海３県に未曽有の大被害をあたえた。

当時、会報の印刷は名古屋タイムズ社に委託していたが、台風の被害を受けた印刷工の多くの人達が出社できなくなり、自社の新聞発行もままならない有様で、委託を受けていた名北協会の機関誌の印刷まではとても手が回らない状態に陥った。

それでは―名北協会の機関誌の発行が止まる―との危機感から事務局職員を総動員し、活字ひろいを手伝うことになったが、馴れない仕事でもあり、大変苦労したという話が語り草になっている。

―標題を「名北労基」と改称―

伊勢湾台風の襲来した昭和34年、機関誌の標題を従来の「名北労働基準協会報」から「名北労基」と改題した。

これは―基準協会報―では、その性格も、また内容も内輪という限界のなかに閉じ込めてしまう恐れがあり、この限界を超え一般性のある広がりを求めて標題を―名北労基―と改題し今日に至っている。

―にぎにぎしく誌面を飾った数々―

「名北労基」と改題したのを機に誌面の体裁、内容、企画など一層の充実を図った。

改題を記念して最初の読み物として在名の音楽評論家・森一也氏の随筆「音楽千一夜」が登場し、昭和58年まで２８５回の長期連載となった。

この間、労働時間関係、産業安全、労働衛生、労務管理、労災補償など関係分野において常に時代を先取りし、行政機関に協力しつつ質的レベルの高い記事の掲載につとめた。

「名北労基」発刊１０００号記念特集号

その一方、親しまれる「名北労基」をめざして「音楽千一夜」と並んで、小山治世氏（小栗利治氏）「労災情話」、服部鉦太郎氏（郷土史家）「幕末・明治名古屋の顔」、山田昇平氏（大須ういろ本店社長）「一寸味のある話」、芦永大児氏（早川寿一氏）「さろん・ど・おとこおんな」、柱善三氏（名古屋市助役・浅井岐一氏）「お座敷ずいひつ」など味のある独特の読みものが誌面を飾った時代でもあった。（肩書等は当時）

―「名北労基」１０００号発行を通過点として２０００号をめざす―

機関誌「名北労基」も昭和27年１月10日「名北労働基準協会報」の名称で第１号発行以来40年を経て、平成４年６月21日号（当時月３回発行）をもって１０００号を迎えた。

今後はさらに誌面の充実につとめ、行政機関と会員事業場との橋渡し役として１０００号の歴史の上に立ち、より一層時代の要請に応える労働関係総合情報誌として２０００号をめざして走りつづける。

（名北労働基準協会副会長）